

ハインリッヒ・フォン・クライストの ノヴェレ『拾い子』について

——„Übel“ を中心にして——

南 勉

序

クライストのノヴェレ『拾い子』は、1811年「物語集第二巻」に収められ、はじめて公刊された。彼のほとんどのノヴェレは、作品集に収められる前に雑誌などにおいて発表されている。そして当該作品に関する記録がないため、この作品の成立時期は判然としていない。このような成立事情は、偶然とは思われない程、作品の内容と共通しているような印象を与える。

ところで当該作品において、三つのモチーフが叙述されている。第一のモチーフは、拾い子ニコロの義父ピアキーに対する忘恩であり、第二のモチーフはニコロとコリノとの偶然的酷似性であり、第三のモチーフは、ピアキーのニコロに対する復讐である。第一のモチーフと第三のモチーフとは表裏一体の関係であることは明らかである。第二のモチーフは、アナグラム COLINO—NICOLO を導入し、この作品をクライマックスへ導く重要なモチーフである。作品の主人公は、題名によると、ニコロのはずであるが、ピアキーもエルヴィーレも主人公の如き観を呈している。そこでこの三人を関連付ける媒体は何であろうかという疑問が生じてくる。義理の関係とは言え、三人は親子であり、家族である。この三人は、相互に孤立している。この三人をつなぐものは家族としての絆ではなく、むしろ „Übel“ であるように筆者には思われる。従って当該小論においては、この三人の性格を規定し、三つのモチーフを検討しつつ、この三人と三つのモチーフをつなぐ媒体である „Übel“ について考察してみたい。

I

まずニコロに視点を向けてみよう。ニコロは、拾い子であり両親を失っている人間であり、ペストに感染している。第一点において、彼は人間に対する信頼関係を持っていない。拾い子で孤立しているが故に頼みとするものではなく、四囲の好意に執着するより他はない。そして頼みとするものがないだけに執着する対象も変化する。第二に彼は、ペストに感染しているが、彼自身このペストによって死去することはない。このペストこそは、後でみるようにニコロの特性であり、否彼こそペストの化身なのである。

ペストに感染して警吏に追われている彼は、偶然出会った行きずりの旅の商人に自分を守護してくれるべく嘆願するより他になすべきすべがない。ピアキーは仕方なくこのニコロを拾うが、その結果ニコロの第二の面が災いをもたらすことになる。

—; in Ragusa angekommen, wurden nunmehr alle drei, unter Aufsicht eines Häschers, nach dem Krankenhause abgeführt, wo er zwar, Piachi, gesund blieb, und Nicolo, der Knabe, sich von dem Übel erholte: sein Sohn aber, der eilfjährige Paolo, von demselben angesteckt ward, und in drei Tagen starb. (1)

(訳)

ラグーザに着くと三人とも一人の警吏の監視裡に病院へ送られた。病院ではピアキーは健康のままであり、例の少年ニコロは病気から回復した。ところが十一歳の彼の俵パオロはそれに感染し、三日のうちに他界した。

引用中の „Übel“ は、明らかに病気のことであり、具体的にはペストのことを意味している。ヘルマン・パウルによるとこの語は、害を与えるもの、あるいは不快な感じをもたらすもの、という意味である (2)。

ニコロは、この „Übel“ に感染していながら皮肉にもこれによって死ぬことはない。一方強者であるピアキーは、この „Übel“ には感染しない。ところが十一歳のピアキーの実子パオロは、これに感染して死去する。文脈からわかるように、この „Übel“ は、死と関連している。つまりニコロの „Übel“ に憑かれた人間は、死すべき運命に到る。強者はこれには感染しないが、弱い

者はこれに感染して死去する。この点には注目すべきである。ここからこの „Übel” は、弱者を食い殺す悪魔であり、ニコロはその化身であるということが判然としてくる。しかしここで言う „Übel” は自然的な病気であるので、ここにニコロの意図や悪意は秘められていない。そしてピアキーとの出会いにおける場面においても決して意図や悪意は感じられない。

Dabei faßte er des Alten Hand, drückte und küßte sie und weinte
darauf nieder. ⁽³⁾

(訳)

その際彼(ニコロ)は、老人の手をとってにぎりしめ、口付けをし、その上に泣いて涙を流した。

ここには確かに虚偽は感じられず、読者は同情を余儀なくされる。しかし無垢という形で „Übel” が出てきているのである⁽⁴⁾。これは実に驚くべきことである。従ってピアキーは、善良であるがためにニコロに同情した結果愛児を失うことになっても、ニコロに対して憎悪の念を抱懐することはない。そしてニコロには、「言葉少なく」「むっつりとして」「表情を変えない」点を除くと、不気味な点はあまり変じられない。しかしテキストを熟読するとニコロの冷酷さが、巧妙に叙述されている。ピアキーが実子を失った悲しみのあまり「涙をふいている間、彼は持ちあわせていた袋の中から一にぎりのくるみを取り出し、口の中に入れてかみ割っていた」⁽⁵⁾のである。このような彼は、ピアキーの悲痛な心情などおよそ理解できないし、またそうする気もない。こういう面は、無垢を装った „Übel” 以外の何物でもないのである。全てが無垢の装いで現われるだけに、ピアキーはニコロの „Übel” を看破できない。このように „Übel” は、無垢を装って弱者へ向って作用する。ニコロの二つの側面は、このように相即不離の形で展開してゆく。

養子になった彼に関して、義父母との内的関係は作品において全く叙述されていない。従って彼は、両親との内的関係がないので、信頼関係を保持していない。詩人が彼のことを „Gottes Sohn” (神の俣) と規定する時、この規定は的確にニコロ像を把握している。というのは神は、述語を持たない孤立した存在であるからである。ニコロは完全に孤立した存在である。そして更にこの規定は、ニコロの „Übel” の志向する究極の対象を示唆しているのである。

II

ここでひとまずニコロからピアキーへ視点を転じてみよう。ピアキーは、ローマの富裕な土地ブローカーであり、しばしば商用の旅に出る。彼は、旅に出る時新妻エルヴィーレを親族の下に託し、実子の健康を商用より優先し、実子の死を深く悲しみ、嘆願するニコロを拒否することはできない。ここから彼は、善良な優しい人間であるということが判然とする。そして彼は、老年にも拘らず活動的で、現実に積極的に関与している人間である。

彼の発想は、常に商業的かつ法的発想である。彼はまず、拾い子ニコロを「養子」にする。そして読み書き算術を習得させ、そして彼を会計係にする。その後ニコロが結婚した時に、ほとんど全ての財産を法的に譲渡する。これらの行為は、悉く商業的かつ法的発想に依拠している。勿論これは、ピアキーなりの善意なのであるが、しかしあくまでも彼なりの善意にすぎない。新妻エルヴィーレに対しても事情は大して異ならない。作品においてエルヴィーレと結婚する過程はほとんど叙述されていない。エルヴィーレに関しては後述するが、彼女との結婚生活には内的紐帯はなく、エルヴィーレは分裂状態で半分過去に生きている。ピアキーは、旅に出る時妻を親族の下に託したり、あるいは状況に応じて何くれとなく細心の配慮を払ってはいるものの、それは、あくまでもピアキーの善意と彼なりの発想に依拠している行為に他ならない。ピアキーは老人で、エルヴィーレは若い女性である。彼は、彼女を理解しているようで理解していない。

ピアキーは、教会の不倶戴天の敵であり、自分の死後「やがてニコロのものになる莫大な財産をあてにして」⁽⁶⁾ニコロを引きつけようとする僧侶たちとは一切関係をもたない。僧侶たちは私利私欲の権化であり、ピアキーは彼らの存在そのものを容認できない。つまり僧侶たちは、彼の発想の枠外に存在しており、彼自身の発想を超越しているからである。ピアキーは、あくまでも自分の発想からのみ判断を下している。彼の生は、法と契約を基盤とした近代社会の典型的な生であり、合理的で一貫している。しかし作品において彼をとりまく世界は、人物は、悉く非合理的で、彼の発想を超越している。彼の発想が合理的であるだけに、彼の生は確固としたものであり、彼自身積極的に現実に関与して行けるのであるが、四囲がそれを超越している時彼の発想は力を失う。ニコロもエルヴィーレもそしてカルメル派の僧侶たちも彼の発想の枠外に存在しているために、形態こそ異なれ、彼自身もまた孤立した存在なのである。従っ

て彼は、彼らとは相容れない存在である。彼は、法と契約の中でのみ真価を発揮できる人間であり、法と契約という枠の外では生きられない存在である。教会や僧侶たちは、そのような枠を立場上支配した超越しているだけに、彼とは必然的に対立する。そうなると彼の合理的発想は、正義感へと変容してゆくことにならざるをえない。しかしここではまだそれは問題ではない。ピアキーは、典型的な近代社会の人間であり、孤立した存在なのである。

III

ニコロの „Übel“ の最初の犠牲者は、パオロであった。この „Übel“ は、弱い者へと向かい、そしてその弱いものを容赦なく食いものにしてゆく。しかも恐ろしいことにこの „Übel“ は、無垢というヴェールをまもって侵入してくる。第二の犠牲者は、エルヴィーレの姪でニコロの妻コンスタンツェである。この結婚については、「ニコロが二十歳の時、エルヴィーレの姪で彼女の監督の下ローマで教育された若い、愛くるしいジェノア生まれのコンスタンツェ・パルケットと結婚したので…」⁽⁷⁾ としか述べられておらず、過去の経緯は一切省略されている。この件から、二人の結婚の性格がはっきりと示唆されている。ニコロは、前述したように、ある対象を獲得しても、その特定の対象に固執するわけではない。この結婚は、早くも十五歳にして異性に対する性愛がはじまり、それを心配した義父母の糊塗策であり、従って愛はその媒介にはなっていない。従ってニコロの悪癖は、義父母の期待も空しくおさまりはしない。

Doch da Nicolo sich in seinem zwanzigsten Jahre, mit Constanza Parquet, einer jungen liebenswürdigen Genueserin, Elvirens Nichte, die unter ihrer Aufsicht in Rom erzogen wurde, vermählte, so schien das letzte Übel damit an der Quelle verstopft; ⁽⁸⁾

(訳)

しかしニコロが二十歳の時、エルヴィーレの姪で彼女の監督の下ローマで教育された若い、愛くるしいジェノア生まれのコンスタンツェ・パルケットと結婚したので、最後の悪癖はそれによって根源をたたれたように見えた。

引用中の „das letzte Übel” とは、明らかにニコロの性愛関係のことである。最後の悪癖は、「根源をたたれたかのように見えた」だけであって、決して根絶されてしまったわけではない。„Übel” の化身であるニコロは、愛を知らないしまった問題にしない存在であるので、女性を愛の対象とはみなさない。コンスタンツェが「若くて愛くるしく」またいかに「彼を愛していた」ところで、このような愛は、それを歯牙にかけないニコロを前にしては意味をなさない。コンスタンツェは、ニコロの前ではもろく弱い存在である。

結婚に関する叙述が少ないのと同様、結婚生活一年間については全く叙述されていない。従ってこの結婚は、その本来の形態をなしてはいない。だからニコロは、妻がありしかも義父に厳禁されているにも拘らず「秘かに妻にかくれて、友達に招待されているという口実の下で」⁹⁹ 司教の妾クサヴィエラ・タルティーニとの性愛関係を結び続けているのである。ニコロの „Übel” を看破しえないピアキーの投じた糊塗策は、効を奏さない。ニコロは、明らかにピアキーの発想を超越している。ここに意識されない二人の対立が潜在している。

愛のない結婚生活は短かく、一年後コンスタンツェは出産に際して死去する。これは、明らかに無垢を装ったニコロの „Übel” が原因である。第一の犠牲者のパオロはベストで、コンスタンツェは出産で、一命を落している。二人の死因は、自然的な病気であるが、この事実はニコロの „Übel” が無垢の装いをしているという好個の証左である。「生前妻に愛と誠意を尽さなかった」ニコロは、妻の死後「悲しみを慰さめるためという口実の下に、カルメル派の僧侶たちの僧房を遊びまわり」¹⁰⁰ 司教の妾と接するようになってゆく。ニコロにとって妻の死は、決して悲しみとは映らない。これは、ニコロにとって当然のことである。そして彼の „Übel” は、ここから無垢の装いをとり払い、意図的なものへと変容してゆく。

第二の犠牲を払ったピアキーが、ここに到って憤然としてニコロに仕打ちをしたのは、ピアキーの発想からして当然と言えよう。なぜならニコロが、法的世界をふみにじっているからである。ニコロは、義父の仕打ちにも拘らず「コンスタンツェの遺産のために老人の好意と親切を必要とした」¹⁰¹ ので、老人に対しては反逆しない。ニコロの „Übel” は、弱者へ常に向い、強者へは向わない。

IV

ニコロの „Übel” は、弱者へ向い弱者を容赦なく食いものにしてその度に強くなってゆく。意図的になった „Übel” は、今度は義母エルヴィーレをその対象とする。

エルヴィーレは、現実生きつつ意識は過去をさまよっている分裂した弱い人間である。彼女が分裂した人間になってしまったのには理由がある。それは、炎火に包まれ死と境を接していた少女の彼女を身の危険を冒して救出してくれた騎士の、不運にして悲痛な死である。その強烈な衝撃のために彼女は、積極的に現実に関与して行くことができない。彼女は、「自分のために青年が苦しみ他界した時のことをほんのかすかにでも思い出させるようなきっかけがあると、いつも昂奮して涙を流し、なぐさめなだめる術がない」¹⁰ までに激しく悲しむのである。彼女のかもし出す雰囲気は、若い女性であるにも拘らずそこはかたなく暗い。彼女は自室にこもると、命の恩人コリノの等身大の絵の前でひたすら祈りを捧げる。ここから彼女の悲哀が、いかに根深いものであるか想像できる。彼女は、明らかに孤立した存在である。ピアキーがいかに細心の配慮をしても、彼女の心からコリノに対する崇拜の念は消失しない。彼女は、悲しみを前にすると、常に過去の世界に沈湎する。彼女の発想の原点は、常にここにあり、彼女は全てを、この視角から見つめ、判断して行動するのである。従って彼女は、ピアキーやニコロの発想を理解できず、またピアキーもニコロも彼女を理解できない。三人は、家族でありながら相互に孤立している。三人の間には、内的紐帯は存在していない。エルヴィーレは、現実生きながら意識は過去をさまよう、所謂かげろうの如き存在である。

ところでこの罪なきエルヴィーレが、どうしてニコロの „Übel” の対象となるのであろうか。それは、エルヴィーレに即して言えば、第一に彼女が弱い存在であり、第二に若い女性であり、第三に彼女の結婚生活に内的紐帯がないからである。一方ニコロに即しえ言えば、彼が彼女のことを誤解するからである。彼は、自分の妻の葬儀へ彼をまんまとおびき出し赤面させた企図が彼女に起因していると独断的に判断する。そしてそれ故に彼は、彼女の敬虔さに懷疑を抱き、彼女の恍惚とした礼拝姿を見て自己の独断を疑わない。そして彼は、秘かに義母の部屋に入室して等身大の肖像画を見た時、当惑こそすれその絵の騎士姿が自己のそれと酷似しており、また自分の騎士姿を見てエルヴィーレが失神した事実を考慮して、ますます彼なりの確信を深めてゆく。更に自分の名

前を構成している NICOLO という六個の文字を組み変えている間に COLIN-O という組み合わせを発見した時、このアナグラムの中には自分の名前が秘められているということを、彼は信じて疑わない。そしてエルヴィーレが、この組み合わせを見て当惑のあまり紅潮して涙を流してこの文字をかきませた時、彼の確信はその極に達する。

ニコロの論理は、とても明解であるように思われるが、果して当を得ているであろうか。そうではない。彼の論理は、復讐の念と欲情で曇っている。というのは第一に、エルヴィーレは礼拝の時ニコロとではなく、コリノと叫んでいる。そして彼女がニコロの騎士姿を見た時失神したのは、その姿をニコロだと思ったからではなく、その姿を見てコリノのことを想起したからである。第二に肖像画の騎士とニコロの騎士姿との酷似は偶然にすぎない。ニコロ自身当初は、この点に気付かない。ニコロには、エルヴィーレが彼の騎士姿を見て失神した理由がわからない。第三に彼は、エルヴィーレが例の組み換え文字を見て当惑する本質的な理由を知らない。この理由を知っているのはピアキーだけであり、だからこそ彼は、彼女の面前ではコリノのことなどおくびにも出さず、またコリノを想起させるようなことを言わないように配慮している。しかしニコロには、このような配慮はできない。

前述したようにエルヴィーレの発想の原点は常にコリノであり、他の人間はその原点に関与できない。コリノとニコロを比較してみると、両者は偶然その騎士姿が酷似しており、また六個の文字を組み変えることによってコリノがニコロになるという二点が表面的に共通しているだけであり、他の点はあまりにも相違している。コリノは他界した過去の人間であり、ニコロは生身の人間である。またコリノが身の危険を冒してまでエルヴィーレを救出した天使のような人間であるのに対して、ニコロは悪の化身である。従ってニコロの論理は破産する。

アナグラムがコリノからニコロへと変化する時、エルヴィーレの世界は、天使に守護されているかのように見えたものから悪魔の世界へと変化する。ニコロは、復讐の念と情欲から悪魔的計画を挙げる。彼は、彼の騎士姿を見て失神したエルヴィーレの肢体に熱い口付けのつぶてを雨とふらせる。

ニコロのこのような行為は、明らかに彼の意図的な „Übel“ である。そしてまた義父や義母の好意と善意をふみにじる忘恩の反逆である。ニコロの „Übel“ は、悉くここに収れんされる。ピアキーもエルヴィーレもお互いに孤立した存在であり、自分の視角からしか発想していないため、ニコロのこのよ

うな反逆を予測できない。とりわけエルヴィーレは、分裂したかげろうの如き人間なので、このような現実においては抵抗する意志と力を保持しえず、自己の意志とは無縁に自己の運命を甘受せざるをえない。罪なきエルヴィーレはあまりにも弱い存在であり、ニコロの „Übel“ を前にしては生きる力を持ちえず、彼女には死しか残されていない。

V

ニコロの „Übel“ は、常に弱者をその対象として容赦なく食いものにしてきた。そして最後の犠牲者は、義母エルヴィーレであった。エルヴィーレの死は、必然的にピアキーをしてニコロと対立せしめる。このような状況に直面したピアキーは、もはやニコロの存在を容認できない。エルヴィーレは、いかに分裂した孤立していても、ピアキーにとって大切な存在であった。ニコロがエルヴィーレを奪ったという事実は、ピアキーにとって二重の意味を持つ。それは、彼の善意に対する冒瀆的反逆であり、またピアキーの発想の否定でもある。従って対立が激化したこの段階において、ニコロとの共存を否定せざるをえない。彼に残された道は、ニコロを追放するのみである。そしてニコロの追放という手段は、多大の犠牲を払ったにも拘らず、寛大な措置と言わねばならない。ここにおいてピアキーは冷静であり、決して狂ってはいない。ところがニコロはこの措置を甘受するどころか、一層激しく反逆する。出て行くべく指示されて、彼は次のように答える。

—:an ihm, dem Alten, sei es, das Haus zu räumen, denn er durch vollgültige Dokumente eingesetzt, sei der Besitzer und werde sein Recht, gegen wen immer auf der Welt sei, zu behaupten wissen! 09

(訳)

出て行くべきは老人の方である。というのは自分は完全に有効な証書によって所有者と認定されており、たとい相手がこの世の誰であっても自分の権利を主張できるからである。

この発言は、明らかにピアキーに対する挑戦である。ニコロがこのような発言を敢えてできるのは、ピアキーから財産を合法的に譲渡されているからであ

る。この法的根拠があるためにニコロは、それを逆手にとってピアキーと対立してゆく。ここに到ってピアキーの好意と善意は悉く踏みにじられ、ニコロの „Übel“ はその極に達している。神の子と規定されたニコロは、悪の神のもとへと赴き、ピアキーと激しく対立しながら、司教に保護を求めて万全を期している。法を支配する教会がニコロに与している状況では、ピアキーがいくら努力してもその甲斐も空しい。彼は、裁判において決定的な敗北を喫する。ここでニコロの „Übel“ は、もはやひとり彼のみのものではなく、司教のそれと一体化して巨大な力を保持している。

ピアキーは愛妻を失い、また経済的な基盤まで失っている。かかる状況は、「人間からその支えとか、重要な最終目標とかを奪い去ってしまう不幸、そのために、人間がもう感覚という持ち合わせしかなくなり、踰躑とよろめき歩くより他はない」¹⁰ 実に悲劇的な状況である。このような極限状況に彼を陥れたものは、ニコロの „Übel“ 以外の何ものでもない。これまでおよそ „Übel“ とは無縁だったピアキーの中に、あたかもニコロのそれに感染したかのように „Übel“ が生じてくる。老年のピアキーには、失うものも守るべきものもなく、あるのはニコロに対する復讐の念だけである。ニコロが冷酷無比な発言をするまでは、彼は寛大であった。しかし „Übel“ に憑かれた今の彼は、狂暴な悪鬼と化している。彼は、狂気と憤怒のあまりニコロを惨殺してしまう。

Durch diesen doppelten Schmerz gereizt, ging er, das Dekret in der Tasche, in das Haus, und, stark, wie die Wut ihn machte, warf er den von Natur schwächeren Nicolo nieder und drückte ihm das Gehirn an der Wand ein. ¹⁰

(訳)

度重なる苦悩に刺激されて彼は、判決書をポケットに入れて家へ帰った。怒りのために強くなっていた彼は、生来彼よりも弱いニコロを投げ倒し、壁に脳髓を押しつけた。

この光景は、凄惨極まりない。この殺害は、明らかに狂気の沙汰である。そしてそれは、ピアキーを破滅へと導くものである。しかしこのような極限状況にあるピアキーにとって自己の破滅は副次的な問題にすぎない。というのはこの状況において、彼が人間的に生きる余地は全く残されていないからである。

そもそも善良でありながら „Übel” に憑かれたがために残酷な殺人鬼になってゆく運命に、ピアキーの悲劇がある。

ところでピアキーの復讐の対象は、ひとりニコロだけではない。ニコロは、神の子と規定された時、カルメル派の僧侶たちと結託すべく方向付けられている。そして結末において、予測通りのことが起っている。従ってピアキーにとって、カルメル派の僧侶たちもその復讐の対象となる。しかし今のピアキーは無力に等しく、ニコロに対するような復讐はしえない。当時の教会国家においては、いかなる罪人も赦免を受けるまでは処刑できないという法がある。従って僧侶たちは、彼に赦免を受けるように勧める。しかし彼は、絶対にそれを受けけるわけにはゆかない。僧侶の勧めに対して彼は、次のように答える。

—Ich will nicht selig sein. Ich will in den untersten Grund der Hölle hinabfahren. Ich will den Nicolo, der nicht im Himmel sein wird, wiederfinden, und meine Rache, die ich hier nur unvollständig befriedigen konnte, wieder aufnehmen! ⑩

(訳)

わしは、祝福など受けとうはない。わしは、地獄のどん底まで落ちて行くんだ。あのニコロの奴めは、よもや天国にはいないだろうから、わしは奴を見つけて、この世では存分にできなかった復讐を再度やってのける所存なんだ。

これはすさまじい陳述である。ピアキーは、教会を完全に超越している。この陳述は、ピアキーのささやかではあるが不屈の抵抗である。彼は、ニコロのために実子を、姪を、そして悲痛なことに妻まで失っている。そして最後に司教から、経済的な基盤まで奪われている。つまり、彼の善意と好意は全て踏みこまれ、加えて合理的な発想さえも完全に否定されている。そして殺人鬼となった今の彼には、死しか残されていない。別言するなら、死しか残されていなかったから殺害をしてしまった。このような状況は、悲惨としか形容できない。ピアキーの陳述は、すさまじい印象を与えるけれども、このような状況を考慮に入れると、何かしら説得力を持っているように筆者には思われるのである。

む す び

当該作品は、『Übel』のヴェールに包まれている。そしてその『Übel』は、ペストに表象される。悪の化身であるニコロのペストが、弱い存在を死へと到らしめる。そしてそのペストは、次第に意図的なものへと変容して合理的な強い存在まで否定し、そしてそれなりに存続してゆく。従ってここにおける『Übel』は、人間の意志によってはいかんともし難い悪魔なのである。登場人物たちは、皆この『Übel』に支配されている。この『Übel』は、ペストのように個の中に潜伏して、機あるごとに力を得てゆく。そしてこの『Übel』は、最終的にカルメル派の司教の欲得と軌を一にしている。このような『Übel』は、合理的な発想の枠外にありそれを超越している。そしてそれは、合理的世界を容認しない。従ってそれは、前近代的な遺物である。それは、実に非合理的なものである。作品において描かれているニコロとピアキーの対立は、別言するなら非合理的世界と合理的世界の対立である。そして結果的に後者は破滅してゆく。この破滅は、ピアキーの意志によってはどうにもできない。合理的世界と非合理的世界の対立と前者の敗化、そして敗北の苦悶と人間の意志の無力さを痛感させられる苦悩を当該作品は形象化しているのである。

注

- (1) H. v. Kleist, Sämtliche Werke u. Briefe 2. C. Hanser Verlag. (以下 Werke と略記) S. 200
- (2) H. Paul: Deutsches Wörterbuch. Max Niemeyer Verlag. S.682-683
- (3) Werke, S. 199
- (4) G. Blöcker : H. v. Kleist, Argon Verlag. S.134
- (5) Werke, S. 201
- (6) *ibid.*, S. 201
- (7) *ibid.*, S. 201
- (8) *ibid.*, S. 201-202
- (9) *ibid.*, S. 203
- (10) *ibid.*, S. 205
- (11) *ibid.*, S. 206
- (12) *ibid.*, S. 203
- (13) *ibid.*, S. 213
- (14) E.シュタイガー : 詩学の根本概念, 法政大学出版局. 高橋英夫訳. S. 235
- (15) Werke, S. 214
- (16) *ibid.*, S. 214-215